

---

# 恋する魔剣士

不協和音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋する魔剣士

### 【Zコード】

N6719X

### 【作者名】

不協和音

### 【あらすじ】

勇者に恋する魔剣士ギルティアには決してしられてはいけない秘密があった。

## 魔剣士ギルティア

私は勇者が好きだ。

誰にでも優しい所とか、頑張りやな所とか、直ぐにムキになる所とか、言い出すときりがない。

だけど、この思いは伝える事は多分一生ないし、誰にもしられる事もない。

私は勇者の仲間の魔剣士だ。勇者とは幼なじみで剣の腕は一緒に上げてきた、お互い信頼しあっている、勇者にとって親友みたいな物だ。

それ以上でもそれ以下でもない…

「ギルティア、剣の稽古に付き合つてくれてもいいか？」

勇者のアレンが言った。

「良いよでも手加減しないからな。」

ギルティアは挑戦的に言った。

「のぞむところだー。」

アレンは満面の笑みで答えた。

“キン カン キンキン”

辺りに剣の音が響いた。あれから直ぐに剣の稽古を二人は始めた。二人の打ち合いは激しく、二人の稽古を見ている、他の仲間が早く終われよと野次を飛ばす程だ。

“キン”

勝負は一瞬で決った。ギルティアがアレンの剣はじき、アレンの剣が一人より1メートル先に突き刺さった。

「私の勝ちだなアレン」

ギルティアは剣の先をアレンに向けながら言った。

「くつ…次は僕が勝つ」

アレンは悔しそうに言った。

「このメスゴリラ～アレン様に何するのよ～」

割つて入つて来たのは白魔導師のリリーだった。

「誘つたのはアレンだ。」

ギルティアはそりりと言いその場から離れた。

ギルティアは離れる際にチラリとアレンの方を見るトリリーが回復魔法をアレンにかけている。アレンはリリーに礼を言い一人は楽しそうに笑いあつていてる。

“ズキッ”

ギルティアは胸の奥に痛みが走った。

（駄目駄目だ！好きになつたら駄目なんだ。）

そうギルティアは自分に言い聞かせる。

だが、この胸の痛みは消えない…ズキズキと痛む。

ギルティアは幼い頃から秘密にしている事があつた。

それは誰にも知られてはいけない事、特にアレンには知られたくない事だつた。

（私は魔王の娘なんだ。私はその気はなくともアレンや皆にとつては…）

## 魔王の娘

”魔王の娘”

ギルティアがこの事を知ったのは、ギルティアが6歳の誕生日を迎えたばかりの頃だった。

—— 10年前 ——

「おかあさんへんだよ、ギルはどひなつちやひの？」

ギルティアは泣きながら母親のマリアに泣きついた。

マリアはギルティアの姿を見て驚いた。

「ギルいつからそくなつたの？」

「わかんないわかんないよ」

ギルティアの姿は人間ではなくなつていた。

髪の色は綺麗な黒色だったのが白銀に変わっていた。

瞳の色は赤色だったのが、右目が緑、左目が青色に変わっていた。

極めつけは肌の色と耳、肌の色は魔族特有の透き通るような白い肌、耳も魔族特有のとんがつた耳をしている。

「「あんなギル、おぬさんギルにずっと黙っていたことがあるの…」

マコアは真剣な表情で言った。

「ギルはお母さんとお父さんの下供じゃなーの」

マコアはゆっくりとギルティアに分かりやすく話し始めた。

## マリア

マリアは夫とアレンの両親と魔王を倒す旅に出でいた。

しかし、マリア達は魔王を倒す前に魔王の2番目の子供ジルバに敗れた。

ジルバはマリア達を殺したと思いその場を去つたがマリア達は瀕死の状態だが生きていた。

そこに現れたのが魔王の一番目の子供アンだった。

アンは助けてあげる代わりに条件を一つだけ出した。

魔王の6番目の子供、ギルティアを預かって欲しい。

アンは理由も言わずまだ生まれたばかりの子供をマリア達の前に置きマリア達に回復魔法をかけてその場を去つた。

マリアはその事をギルティアに長い時間をかけてゆっくりと説明した。

ギルティアは理解するのに苦労していたみたいだったが理解が出来たみたいで、マリアに質問した。

「おかあさんなんでわたしをつれてかえったの？そのままこげればよかつたのにやくそくだから…」

「約束とか関係ないわよ、赤ん坊のあなたをあのままにしておけなかつたのよ」

マリアはギルティアを抱きしめ言つた。

「でも、おかあさんわたしまおののになんでしょ？おかあさんのじじやないんでしょ？」

ギルティアはぼろぼろと泣きながら言つた。

「違う！ギルはお母さんの娘なの！分かった？」

マリアはギルティアをさらに強く抱きしめ言つた。

マリアはギルティアの最上級魔族としての力に強力な封印魔法をかけた。

封印には強力な魔力を有したため封印後、マリアは白魔導師としての力を使い果たしてしまい現在魔法は使えなくなつた。

現在

「ギルティア、待つてくれ！」

アレンはギルティアの後を追つてきた。

「何だ？ 稽古は私の勝ちで終わつたはずだろ、アレンはリリーの所にでもいけばいいだろ」

ギルティアはぶっきらぼうに言った。

「何故リリーの所に行かないといけないんだ？  
僕はギルティアに用事があるのに」

アレンは不思議そうに言った。

（駄目だ駄目だ！喜んだりしてはいけない）

とギルティアは思わず口を叩きながら自分に言い聞かせた。

「ギルティア聞いてる?」

「すまない。聞いてなかつた悪いがもう一度言つてくれるか?」

ギルティアは気を取り直していつもと同じようにアレンに接した。

「だから、一緒に来てと言つたんだ。」

そう言つてアレンはギルティアの手首をつかみ連れていった。

ギルティアはアレンに自分たちの生まれ育つた村、カルバティンの村長の家に連れて行かれた。

ギルティアはアレンに手首を握られた事で、別の世界に暫く旅立つていたようだが無事生還したようだ。

「なつ、何をしようとしているんだ」

ギルティアはアレンの手をふりほどき言つた。

「何つて魔王討伐の会議に決まつていいんだろ」

アレンは真剣な表情で答えた。

「僕たちばかりお父さんたちでも成し遂げられなかつた魔王討伐をするんだよ。」

「そりだつたな悪かつたさあ早速會議をはじめよつ

ギルティアはふつきらめつに言ひ、そそくわざと村長宅に入つて行つた。

「なんでいきなり不機嫌になつたんだ?」

鈍感な勇者アレンは不思議そつに独りつぶやいた。

## 魔王討伐会議

村長に部屋通され、部屋の中を見回すとすくずに仲間の皆と前勇者一行は揃っていた。

「遅いわよメス『コラ～アレン様に迷惑かけないでよ

リリーはギルティアが入ってくるなり言つた。

「駄目だろリリー」これから一緒に旅をする仲間にそんなことを言つちやあ

「『1』みんなさい……アレン様でも、メス『コラ』が悪いんですよ

リリーはアレンに甘えた声で言つた。

「会議のことを忘れていた私が悪いんだ。」

ギルティアは何かを言おつとしたアレンを遮り言つた。

「それでは皆さんが揃つたので会議を始めましょう」

話を進めたのは黒魔導師のジョインだった。

「僕たちは幼い頃から一緒に修行をしてきました。それは何のためですか魔王を討伐するためですよ。つまらないことで仲間割れしないでください」

ジョインの言葉で一同は黙つた。

魔王討伐会議は3時間に渡り行われた。

会議によつて決まつたことは3つ。

一つは魔王の13人いる子供全てを殺すこと。

これはアレンの父親の提案だ。アレンの父前勇者はギルティアが魔王の子供だと言つことを知らない。

アンがギルティアをおいて行つたことを知つてゐるのはマリアだけだつた。

マリア以外は氣絶していたらしくアンの回復魔法で復活したマリアは他の仲間を町に連れ戻した。

マリアはその提案が上げられたときは生きた心地がしなかつたが張本人のギルティアが一番落ち着いてるので何も言わなかつた・・・と言えなかつた。

二つ目は聖なる魔武器を集めることだ。聖なる魔武器は光の魔法の力を高める効果と邪悪な魔力を喰らう効果がある。

要は、聖なる魔武器は魔族の側にあるだけでその邪悪な魔力を喰らい殺す事が出来るし、少し傷を付けるだけでも致命傷を打つれる事が出来る・・・らしい

3つ目は死なない事と決して仲間を裏切らない事だ。

以上3つが会議で決まったことだ。

そして、翌日。

勇者一行は村人や両親に見送られ旅だった。

## 血だまつ

旅を初めて2週間、早くも勇者一行は魔王の10番田11番田の子供と戦っていた。

「兄ちやんどうじょう・・・こいつら人間のくせに強いよ・・・」

11番田の子供ゼムが双子の兄ロムに言った。

「大丈夫だ僕たちには必殺技があるじゃん」

10番田の子供ロムはそう言い詠唱し始めた。

ゼムもそれに習い詠唱を始める。

「やばいです何かをするつもりですよー！」

ジョンインは焦った様子で口早に言つたが、間に合わなかつた。

ゼムとロムの詠唱は終わり魔法が発動する・・・

その瞬間黒い霧が辺り一面に広がつたが、それだけで別に何も起こらない。

「みんな無事か？」

ギルティアは、仲間に声をかけたが返事がない、不思議に思い耳を澄ませてみるとつめき声が聞こえてきた。

ギルティアは急いで声の方に近づいた。

「アレン！リリー！ジェイン！大丈夫か！？」

三人は地面に突っ伏して動かない・・・

三人の顔色は死人のように青白く呼吸も浅く意識もない。

「アレン達に何をした！」

ギルティアは叫んだ。

「あれ？兄ちゃんおかしいよ僕たちの必殺技が効かない人間がいるよ」

ゼムは泣きそうな顔で言った。

「嘘だろ！効かないはずがないんだこれは僕たち兄弟やパパ以外には猛毒なんだぞ死ぬはずなんだ！効かないはずがない」

ロムは焦っているがその声はギルティアの耳には届いていない。

ギルティアは完全に思考停止状態に陥っていた。

目の前に苦しそうに倒れている仲間達に何も出来ない

このままでは確実に数分と経たずに死んでしまうだらう

仲間に何もしてあげることが出来ない自分・・・

「うわあああああ——」

気がついたら目の前は血の海だった。

ゼムの手足はちぎれかろづじで生きているようだがもう虫の息だ。ロムの頭がギルティアの足下に転がっている、一目見て死んでいることが確認できた。

「何だ？ 何が起こった・・・」

ギルティアには何が起こったか全くわからなかつた。

辺りを見回すと先ほど居た場所と全く違う場所にいる。

「な・・・んで僕たちを・・・殺す・の？ おね・えちゃん

ゼムはそう言い息絶えた。

何故そんなことを言われたのか意味が分からなかつたが、ふと血あまりを2見、全てを理解した。

そこに「写っていたのは人間ではなく魔族だった。

## 制御不能

「そうだ・・・ そうだった私は人間じゃなかつたんだつた」

ギルティアは泣きそうな声で呟いた。

認めたくなかった、だから忘れようとしていた自分が魔族だということを・・・

認めたなら心まで魔族になつてしまつ、でも私はやつてしまつた我を忘れて暴れてしまつた。

自分で自分の力を制御できなかつた、そればかりか暴れている間の記憶さえない。

もしかしたらアレン達もこの魔王の息子達みたいに殺してしまつたのではないかそつ考へてしまつと自分が怖くなつた。

(大丈夫皆は生きているはずだ、大丈夫)

ギルティアはそう自分に言い聞かせた。

「どちらにせよもつ皆の所には戻れないな・・・」

ギルティアは血だまりに倒る自分を見、そう呟いた。

” ドスツ ”

いきなり背後からの攻撃でギルティアは地面に膝をついた。

「なつ……何を……」

ギルティアは振り返った。

「ギルティアを返せー！」

アレン達だった、ボロボロになりながらも剣を構えている。

「やうやく返してよあんな『コラでも私たちには必要なんだから、返してよーー』

リリーは泣きながら叫んだ。

「ギルティアを返してくださいー」

ジョインもすこい剣幕で言つた。

（良かつた顔生きてたんだ）

ギルティアにホッと息をつく暇などアレン達はさえ無かった、次々と攻撃していく。

ギルティアはその場から逃げ出すことしか出来なかつた。

## 逃げ

ギルティアは仲間の攻撃から逃げきった。

このままの姿では戻つても殺されるだけ、そう思つたギルティアは人間の姿になるために母の元へ戻ることにした。

(私は空が飛べたんだな)

今ギルティアは漆黒の翼を羽ばたかせ空を凄いスピードで飛んでいる。

このまま行けば数分で村へ着く。

ギルティアは自分の魔族としての能力がどれほどあるのか全く分かっていない。

空を飛んだのだけじゃエインの攻撃を必死で避けていたら飛んでいたのだ。

だからこそ自分が怖い、ギルティアは力を封印されていた時でさえ勇者との剣の稽古などは手加減していた。

今人間と戦つたらあの子達みたいに殺してしまっ・・・

ギルティアは自らの手で殺した弟達のことを考えるといったたまれなくなつた。

考えていらっしゃるうちに村に着いた、こつそりバレンによろしく細心の注意

をはらつて母の家にたどり着いた。

「ただいまお母さん、大変なんだ助けて」

”バン バン バン”

銃声が鳴り響く

## バルン

ギルティアはすべての銃弾を避けた。

「おまえは魔族だな！残念だつたな勇者達はすでに出発した」

ギルティアに撃つたのはアレンの父親前勇者であるバルンだった。部屋を見渡すとバルンの後ろに母親のマリアが驚いた様子で見ていた。

バルンは攻撃を繰り出さうとした時にマリアに後ろから殴られ気絶した。

「お帰りギル、早い帰りだと思つたら封印が解けたのね私の力が復活したからそろそろくる頃だと思っていたのだけれど邪魔がはいつたわね」

そう言つとマリアはバルンの頭を憎々しげに軽く蹴つた。

「お母さん、私を元に戻して」

ギルティアは母に頼み込んだが、

「それがあなたの本当の姿よ、それに母さんはもうギルティアの力を封印出来るだけの力はないわ」

「そんなん私はどうすればいいのですか？」

「まあどうあえず自分の力を制御することは覚えました」話はそれからだわ

マリアは微笑みながら言った。

「そんな時間はありません、ここにはアレン達に黙つてきつてこるのです早く合流しないといけません」

「大丈夫大丈夫、お母さんが昔作つた異空間すればいいの、そこで過ごす時間は現実世界では時が止まつているから」

マリアは軽くそう言い、ギルティアを異空間へと連れて行こうとした。

「バロンさんはあのままにして大丈夫ですか？」

「いいのいいの、あいつアレン達がいなくなつたとたん私に関係を迫ってきたのよいに年してどうかしているわ」

マリアは心底呆れたところの様子で言った。

「えつそつなのですか？確かにバロンさんは奥さんはくなつていらっしゃらないですが」

「みんなのは気にしなくていいのよ早く始めるわよ」

「お母さんって強かったのですね」

ギルティア達は異空間での修行を終え部屋に戻っていた。

「もうよ、お母さん実は強かったの。お母さんが教えた魔法忘れず使つてね」

「はい、これでアレン達の所に戻れます。でも、良いのでしょうかアレン達をだます形になります」

ギルティアは不安そうに言った。

「なに言つてゐる嘘は前からつていてるでしょう。それにバレなきや良いのよ」

マリアは満面の笑みで答えた。

ギルティアはこの人だけは敵にまわしたくないなと思つた。

「問題はこいつが決めたことよ」

マリアは足下に転がつてゐるバロンをまた蹴つた。

「うう・・・やめ」

バロンはマリアの蹴りで目覚めた。

「起きたのなら帰つてください。」

マリアはバロンに強い口調で言つた。

「マリア今ここに魔族が居たんだ！」

「そんなのは気のせいです。

マリアは呆れたようひと言つた。

「ん？ ギルティア帰つていたのか？」

バロンはギルティアに氣づき言つた。

ギルティアは異空間での修行で自分の姿を好きな形に出来る魔法をマリアから教わつていた。

「はい、アレン達とはぐれたのでここに戻れば居るのではないかと思つたのですが」

「この町には誰も帰つていない、元の場所に戻つた方が良いのではないか？」

バロンはマリアに蹴られた頭を押さえながら言つた。

「はい、では早速そつじてみます。お母さんありがとうございます。お母さん

す

「はい、行つてらつしゃい、困つたらいつでも母さんが付いてるから

ギルティアは大急ぎで元の場所に向かつた。

ギルティアは自分の姿を隠す魔法をマリアに教わっていったためその魔法を使い空を飛び皆とはぐれた場所に着いた。

地面に血のあとがベッタリと付いている、それだけで他にはなにも見あたらない。

「アレン、リリー、ジエイン」

叫んでみたが返事はない、ギルティアはどうすることも出来ずその場に座り込む。

（やばい眠気が・・・）

ギルティアは眠気に勝てずにそのまま寝てしまつた。

目覚めると顔の田と鼻の先にアレンの顔があった。

「うわああああ～

ギルティアはつい力を込めてアレンを突き飛ばしてしまつた。

”ドンッガラッガッシャン”

派手な音が辺りに響く。

「なにするんだ」

ギルティアは驚いた様子で言つた声が少し震えている。

「それはこいつのセリフよ、メス」「コラ

す」嬉しそうにリリーは言つた。

「リリー、ん?」こには何処だ?」

ギルティアはリリーに訪ねた。

「僕にはなにも言つ」とはないのか?ギルティア

アレンはようよると立ち上がりながらギルティアに向かつて言つた。

「アレン!すまない驚いたのでな」

「あやまつたからもう良いよ、それにしても良かつた。そんなことは無いのは分かつてたけどギルティアが死んじゃったんじゃないと心配だつたんだよ」

アレンは泣きそうな顔で言つた。

(まいづたなあ、気持ちが揺らいでしまつやめてくれ)

ギルティアは自分の気持ちを押さえ込んだ。

「やうよ私たちが目覚めるとあんたと魔王の子供達はいなし・・・心配したんだからね」

最後の方は小声で聞こえにくかったがギルティアはしっかり聞いた。

「あつがとう心配してくれて」

「バカ！し心配なんかしないわよメスバコラのくせこなこといつてるのよ」

リリーはブツブツ文句を言つてゐる

「あの～僕のこと忘れていませんか？」

ジェインは寂しそうに言つた。

嘘

「別に忘れたわけではない」

「やうよ、ただ影が薄かつただけなんだから」

ギルティアヒリリーはフォローをしたが、リリーのは傷口に塗を塗つていた。

「僕だつて心配しましたよ、ギルティアさんが居なかつたのでみんなで探したんですよそしたら魔族同士殺し合いをしていましたよ僕たちと戦つていた魔王の子供を殺した魔族は何故かギルティアさんの剣を持っていたので、殺されたんじやないかと・・・」

ジョインは泣きわうになりながら言つた。

「やうよ、旦覚めたら私たちしか居なかつたし、ギルティアあんたどこに行つていたのよ？」

リリーは不思議そうに言つた。

「私もよくわかつていなんだ、気が付いたらあそこにいた

ギルティアは嘘をついた。

「ふうん、そうあんたがそうこいつなら信じてあげる」

リリーはギルティアの嘘に気づいていたようだつた。

ギルティア達は宿屋を出た。

「こんな所に町があつたのだな」

「運が良かつたよ、天は僕たちに味方しているよ」

アレンが笑顔で言つた。

「これからどうしますか？僕たちがやつたわけではないですが、魔王の子供2人死んだ。大きな進歩ですよ」

ジェインは鼻息荒く言い次に行こうと張り切りだした。

「ジェイン、落ち着け調子に乗ると痛い目にあうぞ」

ギルティアはジェインの方に手を置き落ちさせようとした。

「！？」

ギルティアは触れてすぐ手を引っ込めた。

「どうかしましたか？」

ジョインは不思議そひて言ひ。

「ジョイン、いや何でもない氣にするな」

ギルティアはそつま言つたものの内心混乱していた。

（どうしてなんだ？何故ジョインも魔族なんだ？）

## ジョインの謎

ギルティアは封印が解けたことで魔の力を敏感に感じ「」とが出来るようになつて、ギルティアはそのおかげで自分の魔王族としての力がいかに強いか自覚させられることとなり嫌だつた。

だが、遠くにいる魔物や魔族、魔王族がどこにいるかが分かり便利だとも思つていた。

（触れるまで気づかないなんてジョインは何者なんだ？）

---

それから数日、何事もなく旅は続いた。

魔王族の情報を集め、魔王の子供達を殺す。

正直、ギルティアは自分の兄弟を殺すのは嫌だ。

ギルティアは自分の弟達を殺したことを悔やんでいた、いくら我を忘れていたと言え、仲間を守るためとは言え自分の実の弟を殺してしまつた。

死ぬ間際のおねえちゃんといつ声が耳にこびり付いて離れない。

「どうしたんだ？ギルティア、顔色が悪いぞ」

アレンが心配そうにギルティアの顔をのぞき込む。

「大丈夫だ、心配するようなことではない」

ギルティアはアレンを安心させるように笑った。

「・・・わ分かった、ギルティアが言うのなら僕は何も言わない、だけど本当につらかったりしたら力になりたいから相談してくれ」

アレンは納得できない顔をしていたがそれ以上何も言わいでいた。

「みなさん良い情報を得ることが出来ました、魔王の5番目の子供の情報です。どうやら娘みたいですが、ノルトスにいるらしいです」

ジェインが聞き込みから帰ってきた。

「ノルトス? 何故そんなところにいるのよあそこはのどかな村よそんなわけないでしょ」

リリーは呆れたように言った。

「本當です。今は実害が出ていないのでなにもしていないらしいのですが」

ギルティアはここ数日の旅でジェインのことは何も言わないことに決めた。

(ジェインだつて何か事情が有るはずだそれに自分だつて人のこと

は言えない（

ギルティアはそう考えていた。

「とにかく行ってみよう行ってみて魔王の子供だったら戦えばいい

アレンがそういう早速一行はノルトスに向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6719x/>

---

恋する魔剣士

2011年11月29日22時56分発行